

TOKYO美人と、東京1000ストーリー

約者は刑事

③ 5回連載(006 多摩川)

穂高健一

死ぬ。そういつていた布施和香奈の電話番号は知らない。動かない電車からでは、彼女に連絡の取りようがなかった。

井伊佳元は横目で、車中やホームの乗客たちをみた。その多くがケイタイで、電車が停まった、遅れる、という内容をしゃべっている。ある意味で、電話連絡が取れること自体がうらやましかった。

かれは車内放送に耳を立てた。復旧情報はまったく曖昧で、役に立たない、お詫び放送ばかり。



110番も考え、そのシミュレーションもしてみた。布施和香奈が川に飛び込むかもしれない、と訴える。

警視庁の司令室からは、警察官が多摩川に駆けつけてわかるものはなにかと、彼女の特徴を聞かれるだろう。顔とか、容姿はことばにすれば、漠然としている。どんな服装かと訊かれても、それすらもわからない。多摩川流域のどこらあたりか。その場所となると、二子玉川駅付近だろう、と聞いていど。はつきりしない。挙句の果てには、いたずら電話だ、と思われるかもしれない。

(ここは電車の復旧を待つのみか)

井伊が知るかぎり、人身事故で電車が止まれば、過去の遭遇から判断すれば、約1時間くらいだ。多くはそのくらいで復旧している。となると、二子玉川駅は12時15分に着く。それをもってしても、和香奈との約束時間よりむしろ遅れる。

布施和香奈が遺書を残して死ぬ、といった。そのことばが、井伊の脳裏を何度も横切った。銀座の画廊に立ち寄ったこと自体が、裏目に出してしまったのか。彼女に生きて会えれば、無駄ではない。

銀座のTAKANO画廊に立ち寄りなければ、猫事件の内容がまったく見えなかったのだから。結果として、良かったのか、悪かったのか。それは和香奈の生命しだいだ。

(ここで、焦って、電車のルートを変えても、結果はおなじだ) 迂回策をとってみたものの、じっと待っていたほうが早かった、というそんな過去の体験がいくつもあつた。

ここは辛抱強く待つべきだ、とかれは自分自身に言い聞かせた。

二子玉川駅には12時25分に着いた。かれはすぐさま高架ホームから身を乗り出すようにして、多摩川の上流、下流の河岸を見た。布施和香奈らしい姿はなかった。さらに目を凝らしてみたが、見当たらなかった。

「彼女はもう入水したのか。人間はそうかんたんに死ねるものじゃない」

そこに期待した井伊は、ホームから階段を駆け下りた。前を降りる年配女性が驚き、そして憤っていた。井伊の背後から、危ないじゃないですか、と叫んでいた。

自動改札は難なく出た。左右を見たが、布施和香奈の姿は見当たらなかった。

「やばいな。ここまで来て、死体を見るなんて、勘弁してくれよな」

かれは祈る気持ちだった。二子玉川駅前は、整備された区画で、真新しい高層ビルが目立つ。そのうえ、人通りが多い。かれには地理勘がなかった。高架ホームから見た、多摩川の下線の方角へと急いだ。玉川通の街並みから二子橋の側道を降りる。



釣り人たちがいる、野川までやってきた。橋を渡りきると、こんどは、小高い丘の緑茂る兵庫島公園へとむかった。歌碑のある緩斜面の道を登りきると、そこは藤棚の休憩所だった。

多摩川の河岸が一望できた。視野のなかに、布施和香奈の姿はなかった。かれは腕時計を見た。12時35分だった。

もう一度、遠近に目を凝らしてみた。右手の上流には、東名高速道路の高架橋が景色のなかに水平に溶け込む。視線を遠く近くに引いても、彼女の姿はなかった。

「どこにもいないのか」

かれは電車の遅れが実に腹立たしかった。ほーむから自殺する奴も、他人の迷惑を考えて死ねよ、といったくなかった。かれはそんな憤りと、不安を抱えながら、眼下にみえた、人工の瓢箪池^{ひょうたんいけ}まで足を運んだ。ここにも、和香奈の姿は見あたらず、手が撃ちようもない、つよい焦燥感を憶えた。

「12時40分か」

多摩川の下流の方角には、鉄橋を渡ってきた電車が、ゆっくり二子玉川駅に入線する光景があった。良い情景のはずだが、堪能する気など、みじんもなかった。

かれは多摩川の本流の川辺まで歩み寄った。人口堰では、川の水が陽光と戯れている。3月半ばの水は冷たそうだ。彼女はす



に多摩川に飛び込んだのか。となると、どこに流れているのだろうか。

「いい加減さん、ここっ」

明るい声がひびいた。瓢箪池のほうから、布施和香奈が近づいてきた。ほっとした安堵が全身を駆け巡った。

「……川で自殺した亡霊

にしたたら、やけに明るい

笑顔だな」

井伊が揶揄した。

「死んだと思っただの？」

「まあな。一度は死を疑ったから、川の妖精のようだ」

井伊は安堵の心境で、彼女の笑顔を見つめた。

「いい加減さんは請け負ったからには裏切らない、信頼の高い人。そう聞いています。どんな難問でも、シャープに解決してくれる。そう思うと、もう嬉しくて」

「それは仲人口だ。買いかぶりだよ」

「猫を連れ戻してくれるでしょ。挙式が数日中で、入籍できるでしょ。3月31日が披露宴でしょ。心底、うれしくて、涙が出ち



やう。ほら」

彼女は涙をぬぐってみせた。

「川の妖精に期待されて、悪い気はしないけど。ちよっと難問過ぎた」

井伊には解決の自信などまったくなかった。かつて真鍋美紀から台場で、嫁姑の問題解決をたのまれた。この成り行きというか、偶然というか、巧く解決できただけだ。自分には裏稼業人としての特別な訓練とか、知識とか、特殊なものを持っていない。いまの段階では、解決への道筋すらない。結末はまったく予測できない。

(一体どうなるのか)

それは自分でもわからない。ただ、これは自分の性格だが、出たところ勝負、度胸で押す、それだけは人並み以上だと思う。この先は、それに頼るのみだ。

「いい加減さんには、遅刻癖がある、と聞きましたから、二子玉川駅で待たされるならばと、一度、マンションに帰ってきました。猫の捜査に役立つかしらと、図録をもってきました」

「遅刻癖は、真鍋美紀さんから聞いた？」

ふたりは川辺を歩きはじめた。

「さあ？ 情報の出所はシークレット」

「まあ、詮索しても意味がないか」

「この図録はわたしが制作しました」

城山比呂志のアトリエで絵画の写真を撮り、資料やデータをあ

つめ、プロフィールを確認してから、印刷にまわしたという。製本・納品後は、顧客にDMで発送していたという。彼女はふいに橋の上で足を止めた。小さな川魚が泳いでいると、教えた。さらにしゃがんで、魚と戯れるかのように覗き込んだ。井伊は彼女の横顔を凝視した。愛らしい表情だった。

「実はけさTAKANO画廊に寄ってきた」

「裏稼業人は、さすが行動が早いよね。きょうは画廊が休みで、閉まっていたでしょ」

「おれ一人のために、

鑑賞させてくれた女性がいた」

井伊はかいつまんで説明しながら、兵庫島公園のほうに足を運んだ。



「それは母の鷹野美沙です。ビルのオーナー社長で、画廊主です」

「顔立ちはよく似ていた。性格はどうも真反対かもな」

「性格は父に似ていると、よく言われます。猫が居なくなると母に知られたのかしら？」

彼女は丘の上で、ふいに立ち止まった。

「気づいたようだ。表面は押さえているが、内心はずいぶん気にしているな。そんな態度だった」

かれは図録のなかの『水瓶と猫』を開いた。

「母は許してくれないわ」

布施和香奈の顔が青ざめた。想像以上に、彼女はおびえていた。

「許してくれないといっても、親子だろう」

「母は他人の前では、冷静な顔がつくれるひとです。ところが、性格はとても強く、妥協のない、きびしいものがあります。親子の縁は切る、と言い出す母です。同棲を話したときも、頭ごなしに、鷹野家の恥です。親が買い与えたもの、全部を残して、素っ裸で出て行きなさい。妥協など、ありません。恫喝や罵声は男以上です」

「内面は厳しそうだった。あなたの画廊での立場は？」

「画廊の展示の年間スケジュールは、社長の母が決めます。個展はどの先生のに、グループ展の申し込みはどこに、企画展のテーマはなににするか。社長が独りで一切合財を仕切っています。経理をのぞいた、その他はすべてわたしです。二人のパートさんを雇っています」

「絵の管理責任は、すべてあなたにあるわけだ」

「そうです。受賞作の『水瓶と猫』は、審査委員の母が特に推した作品です。選者は4人いました」

大学教授、学芸委員、評論家、それに鷹野美沙だった。

鷹野美沙は、城山比呂志の作品にたいして『猫が生きている、独自性がある』といい、特選に推した。学芸員と評論家は、水瓶のほうが良く描けている、猫よりもそつちを評価するべきだ、と

いう。

猫と水瓶はともに目立ち過ぎる、ふたつが相殺しあつて、テーマがぼやけている。大学教授の、その意見が強くなり、最終的に銀賞だった。

「選考結果に不満をもった、母は昨年と今年と二度にわたつて、城山比呂志に個展の機会を与えたのです」

会場では、『水瓶と猫』がいかに素晴らしいか、と自説を述べるのが常だという。

「ほかの絵ならばともかく、『水瓶と猫』のなかから猫が消え、腸が煮えくり返っている。そうみた方が賢明かな」

「母の怒りを想像するだけで、怖い。水瓶のそばに、猫を連れてきなさい。いまに母の怒りの電話が入るわ」

和香奈は心底からおびえていた。

「あなたのケイタイを預かっておこうか」

「えっ。だめです。わたしの個人情報



報が入っていますから」

彼女はバッグを後ろにまわした。

「母親から電話がくれば、まず恫喝されるだろう。怖さから逃げるように、あなたが発作的に多摩川に飛び込む。そうなる、何のために、こつちが手を染めているか、わからなくなる。ケイタイは担保だ」

「もう、死ぬ気はありません。結婚の夢を与えてくれたんですけど」

「この先、溝口刑事とのやり取りも二転、三転するだろう。あなたの性格は落ち込みやすい。それでなければ依頼は断る。途中で、依頼主に死なれたならば、徒労もいとところだ」

「わかりました」

彼女は赤いケイタイを差し向けてきた。

「消えた猫の状況はわかった。次は溝口刑事との関係だ。この修復も難問だ。婚約破棄をどう破棄させるかだな？」

井伊は腕を組んだ。

「むずかしい？」

「泣きべそをかかない。28歳にもなったんだ」

「泣きべそだなんて」

彼女は口を尖らせた。

「溝口刑事が結婚式になぜ来なかったか？ その理由を聞かせてもらおう」

「最初の結婚式は、一年半前で高輪のホテルでした。3日前に、

凶悪な事件が発生したのです。」

多摩川北署の交番警官がトイレから出たところ、刃物で刺されて、拳銃が盗まれた。逃亡する犯人が世田谷の住宅街で、中層マンションの一室に押し入った。家族四人を人質に立て籠もった。「すると、結婚式の当日も、籠城する犯人が捕まっていなかった？」

「いいえ。挙式の7時間前に、事件は解決されました」

包囲する捜査陣が窓を破り、突入して、犯人を逮捕したという。

「それなら、婚約者は結婚式に出られたはずだ」

井伊は首を傾げた。

「犯人が逮捕される直前に、大ケガをしたんです」

「現場に踏み込んで、拳銃で撃たれた？」

「ちがいます」

溝口刑事は、向かい合

うマンションの非常階

段の4階で張っていた。

犯人の拳銃の音で、伏

せたところ、非常階段

を踏み外し、転がり落

ちた。その弾みで、手

摺越しに地面に落下し

て、気絶した。

かれは救急車で運ば



れた。3本の肋骨が折れ、一本が肺に突き刺さっていた。大手術だった。脳神経外科のほうは問題なかったという。

「そんな事情がわかったのが、挙式がはじまる時間でした。披露宴会場のほうにも、大勢が集まっていました」

事情を知った両家の代表が、参列者に頭を下げ、解散してもらったという。

「間抜けな武勇伝だ」

「そのあとが大変でした」

布施和香奈は後日、祝い金、祝電、花束などをもたらした人たちに、一人ずつ連絡を取り、

事情を説明し、謝罪した。

だんだんと、やりきれず、

自分の心が死を望むに近い

窮地に追い込まれたという。

「二度目のドタキャンの理由は？」

『捜査が山場だったから、

急に出られなくなった。申し訳ない。捜査上の秘密だ』

といわれたら、それ以上は

訊けなかったという。

「説明責任を果たしていない。結婚式に参列した人たちに説明がつかない」



「二度も棒にふった参列者に、お詫びするほどに、わたしはもう日ごとに死んでしまいたい、逃げ出したいと気持ちが悪くばかりでした。TAKANO画廊にも出勤できない状態に陥りました」

和香奈の心痛を想うほどに、溝口刑事は彼女の心の痛みを理解しているのか、と井伊は腹立たしくなった。

「画廊に復職したあとも、わたしの心は安定しませんでした。溝口さんと結婚しても、その先が不安で……」

分娩・出産のときも、夫は一度も産院にきてくれない。宮参りは付き添わない。七五三は父親のいない写真になる。幼稚園の運動会にも出られない。子どもとの約束も守れない、かれはそんな父親になる。そこには味わいのない家庭があるのみだ。

「わたしには、結婚後の夢や希望が言いようもなく薄れてきました。溝口刑事の仕事の熱意を理解しようとすればするほど、将来が不安で空虚なものに思えるのです。」

悶々とした日々の和香奈は、ここは婚約を破棄するべきか。しかし、溝口には面と向かって婚約解消を言いだす勇気がなかった。自分に妥協して、学生時代からの愛を結実するか。いつも二者選択にたどり着く自分があった。現実から逃げたい気持ちだが、ときに死への想いになった。

最近のある日、裏稼業人の存在を知ったのだという。

「わたしは自分の心の整理と、婚約破棄の決意ができていないうちに、いい加減さんに会ったのです」

「あなたがこんなに苦しんでいるのに、溝口刑事はどんな気持ち

でいるんだ。そこを知る必要がある」

「わたしにも解りません」

「溝口刑事は、二度目のドタキャンの本当の理由を話していない。ここを知る必要がある。あなたは知る権利がある。推量するよりも、本人から直接、聞いてみよう」

「相手にしてくれないと思います。『財産狙いでしょ』と話して、かれの心は離れましたから」

「あすの午後3時までには、溝口刑事の心を取りもどす。それに、猫も連れて帰る」

「いまは1時半過ぎです。25時間半しかありません」

「時間的に追い込まれると、おれは燃えるタイプだ。平清盛は宮島の鳥居を1日で作った。秀吉が3日で築城した。25時間以内に、ふたつの問題を一挙に解決してみせる」

「いい加減さんは、歴史上の人物に並ぶのかしら？」

「二つの問題を解決しても、歴史上の功績にはならない。それが残念だが」



「わたし期待しているわ。多摩川の水はおいしいのよ」

彼女は心に余裕ができたのか、水のみ場で、笑みを浮かべた。「たらふく飲んだらいい。さっそく、これを使わせてもらう」

井伊は、和香奈の赤いケイタイで、登録された溝口刑事の番号をコールした。呼びだし音が15秒ほど鳴りつづけた。

「二度と、掛けるなど言っただはらずだ」

溝口がいきなり頭ごなし怒った。かれは車の交通量の多い場所にいるようだ。おおかた、なにかの捜査中だろう。

「あなたの出方によっては、布施和香奈はあと1日、厳密にいえば、このさき25時間半の命だ」

井伊はあえて低い声で言った。

「だれだ」

溝口の緊張が伝わってきた。

「この件で一度会いたい。できれば、きょうの日没まえに」

「何者だ」

「会うか、会わないか。刑事の立場でなく、個人の立場で判断するんだな。あんたが判断を一つまちがえば、布施和香奈は多摩川か、さもなければ流されて、東京湾で、水死体で浮かぶ」

「名乗れ」

「池袋の裏稼業人だ」



「和香奈を電話口に出してくれ」

「あらためて連絡する」

井伊は一方的に電話を切った。すぐさま、ケイタイの電源をOFFにした。そして、二子玉川駅の方角に向かった。

(つづく)

写真協力・奈良美和さん(コーチ/コミュニケーションアドバイザー)

絵画協力・高田雄太さん(画家)

写真提供(猫)・中嶋賢子さん(会社員)

取材協力・森田画廊(銀座二丁目)、PIGA(青山)

取材協力・中村裕子さん(博雅・豊島区)

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】